（別紙）

令和４年度生物資源研究センター成績報告会　報告概要

（１）イネ種子の発芽におけるエチレン生成の解析　　　　　　　　　　　　　　　基礎研究部　森田重人

植物ホルモンであるエチレンは、多くの植物種で発芽を促進することが知られています。しかしイネは主要な穀物であるにも関わらず、発芽におけるエチレンの役割についてこれまで明らかでありませんでした。本研究では、イネ種子の発芽時のエチレン生成とその作用について調査しました。その結果、発芽中の種子においてエチレン生成が確認されました。またエチレンはイネにおいても発芽促進に働くことが示されました。

（２）収穫可能な期間が長い８月穫り丹波黒大豆枝豆新品種の育成 ～品種特性及び普及に向けた展望～

　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　応用研究部　内藤一平

京都府特産の黒大豆枝豆『京 夏ずきん』は莢の黄化が早いため、収穫可能な期間が短い。このことが、近年栽培面積と販売単価が伸び悩む一因となっています。この問題に対して当センターは、収穫可能な期間が長く良食味である新しい枝豆品種の育成に取り組んできました。本報告では、新品種の特性や今後の現地普及の展望について概要を報告します。

（３）赤い熟果生産に適した伏見とうがらし新品種の育成 ～有望系統の栽培特性評価～

　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　応用研究部　鴨志田徹也

京都府産の伏見とうがらしの赤い熟果は、ホテル等の業務需要を中心に取引されているが、既存の品種で熟果を栽培すると、樹勢の低下やしおれ果の発生により出荷量が低下します。そこで、これらの問題点を改善したＦ１新品種の育成に取り組んでいます。本研究では、昨年度選抜した新品種候補系統について、令和元年から４年にかけて調査した熟果の収量や果型等の特性を評価し、有望系統の絞り込みを行いましたので、その概要を報告します。

（４）新しい食べ方で京の伝統野菜の復活を　～紫・赤色のカラフルな小カブ品種を育成中～

　　　　　　　応用研究部　岩川秀行

野菜全体の消費量が減少する中、サラダなどの簡便野菜の消費量が増加している点に注目し、当センターでは簡易な調理で食卓をカラフルに彩る野菜として提案するため、京の伝統野菜である舞鶴カブや聖護院カブを母本として、根色が赤や紫の小カブ品種を育成しています。本報告では、平成29年に交配し選抜・固定を進めている系統を中心に、葉や根の色などの特徴を紹介します。

（５）黒ダイズにおける土壌伝染性立枯病に対する土壌微生物資材による発病抑制効果

　　　　　　　応用研究部　德丸晋

京都府特産の黒ダイズでは、栽培初期から収穫期まで、黒根腐病、白絹病などの土壌伝染性の立枯病が発生し、収量や品質の低下を引き起こします。本病に対する有効な防除技術はなく、生産現場からは本病の発生を抑える防除技術の確立が求められています。そこで、令和３～４年にかけて現地黒ダイズ生産ほ場において、土壌中の有用な微生物（バチルス属細菌）による立枯病の発病抑制効果について試験を行いました。

（６）花菜根こぶ病に対する新規土壌処理資材による防除効果　　　　　　　　　　　　応用研究部　北澤勝好

花菜根こぶ病は防除が難しいため、各ほ場の発病リスクに応じて複数の防除法を用い、総合的に対策する必要があります。対策の選択肢を増やすため、新たな防除法の開発に取り組んできました。これまでの試験で、有機酸資材による発病抑制効果を確認しました。今回は、現地の発病ほ場およびその土壌を用いた試験を実施し、その有効性を確認しました。

（７）キュウリ栽培におけるパパイア輪点ウイルスに対する同属ウイルスの干渉作用

　　　　　　応用研究部　門馬悠介

パパイア輪点ウイルス（PRSV）は、京都府内のキュウリ露地栽培において発生が確認されており、キュウリに感染すると減収を引き起こすとされています。しかし、有効な防除技術は存在しません。そこで、PRSVに対する防除技術の確立に向けて、同属ウイルスのワクチン苗による干渉作用を調べたところ、ズッキーニ黄斑モザイクウイルス（ZYMV）およびスイカモザイクウイルス（WMV）による不完全な干渉作用が明らかになりました。